主日の福音 2025/3/9(No.1343)

四旬節第１主日（ルカ 4:1-13）

いま留まっているものは神の愛を体験させてくれますか

四旬節に入りました。「四つの」「旬」の「季節」と書きます。「旬」は 10 日間ですから、40 日間となります。御復活前の回心と償いの季節です。すでに今年の「灰の水曜日」に参加されて、受難の主日で持ち帰った枝を焼いて灰にしたものを頭に受け、断食の務めを果たした人もいるでしょう。この四旬節を過ごす中で、神が喜んでくださる生き方、神が受け入れてくださる生き方をこれまでよりも目指すことにしましょう。

その、四旬節の最初の日曜日の福音朗読に、イエスが誘惑を受ける場面が選ばれています。イエスが悪魔から誘惑を受けて、それをきっぱりはねのけた。それだけのことのように思えるかも知れませんが、「一つの言葉」をもっとていねいに読む、学ぶと、もっと朗読から学べると思います。その言葉は「誘惑する」「試みる」という言葉です。

特に、朗読箇所の最後の場面では、悪魔は「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」（4・9）と誘惑しますが、その根拠を聖書から引っ張ってきます。「というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる。』また、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』」（4・10-11）

イエスもこれに対して聖書の言葉で反論します。「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」（4・12）。誘惑する者も、誘惑を斥けるイエスも、聖書の言葉を拠り所にしています。そうなると、聖書の中で、「誘惑」「試み」はどのように使われているのか知る必要があります。

そこで調べてみると、「誘惑」「試み」について二通りの使い方が示されていました。人が人を「試みる」「誘惑する」というときと、神が人を「試みる」というとき、この二通りの使い方があるそうです。人が人を試みる、誘惑するのは、人への不信と疑い、神への不信と疑いを生じますが、神が人を試みるのは、試練を与えるだけでなく、神の計らい、神の愛を体験する訓練にもなるのです。

あらためて悪魔の誘惑を分析すると、それは「主を試そうとする思い」なのですから、そこからは神への不信と疑いしか生まれてきません。人からの誘いや自分自身の心の中の声が、神への不信と疑いしか生まれないのであれば、それはきっぱり断るべきです。一方、試練を感じながらもそこに神の計らいや神の愛を感じられるなら、試練は単なる誘惑ではなくなるのです。

この世の中に、「試み」「誘惑」は数えきれません。誘惑の渦の中にいるといってもよいかも知れません。それが、神への不信と疑い、人への不信と疑いを生んでいるなら、それらに向き合う必要はありません。きっぱり断る、離れましょう。しかし試みや誘惑の中には、神の計らい、神の愛を体験させてくれるものもあります。

イエス様は四十日間、誘惑の渦の中にとどまり、すべてに御父のご計画、御父の愛を見いだしました。私たちも四旬節を過ごす中で、自分に降りかかる試み、誘惑としっかり向き合い、神の計らい、神の愛に触れる体験としていきましょう。神への不信と疑い、人への不信と疑いを生むものからはすぐに離れましょう。共にいてくださるイエスが、留まるべきか離れるべきかを見極める目を育ててくださいますように。

四旬節第 2 主日(ルカ 9:28b-36)